

I, GW 記録

1) 人生100年の学びの拠点としての「中頓別学園」のスタートに向け、学校教育・社会教育が協働で進めていく方向性について

▶ 中頓別は元々地域と学校の距離が近い。その良さを生かしていく(特に総合学習で)
→ 現在も外部講師として多くの地域の方に関わってもらったり、地域に出向いて学習をさせてもらっている。

→ 学校の中だけでおさまる時代ではない。

→ 地域から色々意見やアイディアをもらい学校は取り組みたい。

→ まだまだ学校の敷居が高く、行き来のハードル

▶ 今後も話し合う機会を増やした方がいい

2) 前半の説明①義務教育学校の教育②施設の建設や利用について、質問や意見

①義務教育学校の教育について

▶ (質問) UDLとは?

→ 好きなものを選ぶ・聞く調べる・学び合うなど学びの選択肢を増やすイメージ

▶ 好きなものを伸ばす教育とは?

→ 苦手なものを放っておくのではなく、UDLでやり方をおぼえて広げていくイメージ

▶ 単学年ではなく異学年で学ぶ良さを生かしてほしい

→ 一緒にやることで、お手本モデルになる。あこがれ。世話(誰かの役に立てる)

▶ (質問) 1~4年(遊びから学びへ) 5~7年(学びを進める) 8~9年(専門的な学び)の違いは? 学年ごとの目標や内容も混ざり合う?

→ 「12年の目指す姿」別表参照、各学年学習指導要領で目指す姿は変わらない

→ 指導要領は元々2学年の区切りで示されている教科もある

▶ 義務教育学校の教育は、教育委員会と学校の先生方に信頼してお任せする。

▶ 地域の一員として、学校祭や発表会に足を運ぶ

▶ 子どもたちが大きくなるために学校外の関わりもつくる

▶ 義務教育学校の教育の柱「教育委員会協働型(地域連携)」が良い

→ 先生方と話すより地域や外部講師が話す方が緊張感をもって聞ける良さがある。

→ 子ども達が発信してより良い町にしていくように

→ 子どもたちと高齢者のつながりをいろいろな学びを通して一緒にできるといい(きっかけは必要)

▶ (質問) 789年生という呼称は外では違和感がないか? 中学生は外で何という?

→ すでに義務教育学校になっている話を聞くと、自分の学校では7年生、外では中1と児童生徒自身が理解して対応している様子があるので大丈夫。

▶ 小中一貫のメリットとして、引継ぎが丁寧になる事、(学園卒業)その後も見据えてできているのがすごい。

▶ R7年当初の不安が期待に変化した

▶ 少人数で生活するより、小中学生が一緒の方が人数が多くていい

▶ こども園→義務教育学校への引継ぎが不安(開校準備でバタバタしちゃうのでは)

②施設の建設や利用について

▶施設の安全面が心配

→防災、避難所でのトラブル、女性やレアなケースを守る配慮を

→小さい子が利用するから安心安全に使う事。トイレ利用時など。

→学校エリア位に入る時は「名札」などをつけて区別をする

▶一緒に活用することで、互いにWIN WINになれるように。

▶公共スペースから学校の様子が見えるのがとても良い。学校側からはぜひ地域の人に学校の様子を知ってほしい。

→様々な大人の様子から、色々な仕事を知ってもらう機会に。子どもたちにとって1つでも選択肢が多いに越したことはない。

▶シニアスクールは?

▶住民の立場に立って新しい施設を使っていく⇒それに賛同していく人たちがいるのか?

3) 中頓別の子どもたちの良さと課題について

▶良さ

→ピンネっ子クラブに参加し、いきいき体験活動ができている。

→交差点のおじぎ

→素直さ

→全部良い

▶課題

→知っている人の中なので困り感を言いにくい。(近い関係だからなおさら)

4) その他

▶部活指導者の確保

→知識や専門性

→宗谷地域の取り組み

例) 浜頓別、小中高合同で連盟への要望をあげるなど 稚内吹奏楽団

▶部活の地域移行への不安

→人数が少なく、選択肢も少ない。丁寧な指導は得られる。

→兼部は検討できないか?

→一度地域移行すると学校に戻せない?

▶部活の地域移行の方法

→団体にまかせてちょっとずつやってもらう体制にしていく(任せる所は任せる)

例) スキー協会などに

▶現在の学校の先生方へ

→FSの子が登校すると褒める。普段登校して頑張っている子も大切にしてほしい。配慮もバランスをとってほしい。

▶外からくる子どもも受け入れていく体制を整えていく方向でいくのか?

5) 学芸大:荻上先生からの助言・講評

▶どの町もこのような学校運営協議委員会と社会教育会議と一緒に開催することを目指しているがなかなか難しい現実がある。そんな中で、中頓別町の地域の結びつきの強さ、学校と地域の距離の近さを生かして合同開催ができる事自体が素晴らしい、中頓別の価値だと思います。

2. まとめと今後の方向性

【1】人生100年の学びの拠点としての「中頓別学園」の方向性

⇒地域と学校の密接な関係性を基盤に、教育委員会・学校・地域が三位一体となった教育をさらに推進する。

▶地域連携の深化

総合的な学習の時間等で、地域に出向く学習や外部講師の招聘をさらに活性化させる。

▶学校の開放性

「学校の中だけで完結しない教育」を掲げ地域の意見やアイデアを積極的に取り入れる。

▶心理的ハードルの解消

現状ある「学校の敷居の高さ」を認識し、さらに地域と学校の対話の機会を増やすことで行き来のハードルを下げる。

【2】義務教育学校における教育の特色と質の向上

⇒UDLの導入と小中一貫のメリットを最大限に活用し、一人ひとりの可能性を伸ばす。

▶UDL(学びのユニバーサルデザイン)の実践

自ら「選び、調べ、学び合う」等学び方の選択肢を増やすことで、個性を伸ばし苦手にも対応する。

▶異学年交流の教育的効果

1～9年生が共に過ごす、単学年ではなく出来るだけ異学年で過ごすことで、下級生は上級生に「あこがれ」を抱き、上級生は下級生を「世話する」ことで自己有用感を育む。

▶系統的な成長支援

現在想定している1～9年の発達段階に応じた目標に向け、こども園からの丁寧な引き継ぎ体制を構築することで、卒業後も見据えた一貫教育を行う。

【3】新施設建設と地域・学校の共生

⇒安心・安全を最優先としつつ、住民と子どもが日常的に交流できる「WIN-WIN」の空間を創出する。

▶相互可視化による学び

公共スペースから学校の様子が見え、また、子どもたちからも色々な町民や大人の姿が見えることで多様な生き方を知る機会とする。

▶安全管理とルール

学校エリアへの立ち入りには「名札」着用を義務付けるなど、地域開放と子どもの安全確保を両立させてほしい。

▶防災拠点としての配慮

避難所運営において、女性や配慮が必要な方々(レアケース)を守れる体制を検討する。

【4】子どもたちの課題解決と部活動の地域移行

⇒素直さという強みを維持しながらも、小規模校特有の課題に対して柔軟な支援体制を整える。

▶内面の豊かさの継承

体験活動への積極的な参加や、地域での礼儀正しい挨拶といった良さは伸ばしていく。

▶多様な登校・学習支援

不登校傾向の子への配慮と、普段登校して頑張っている子への賞賛のバランスを大切にし、外からの転入生も受け入れられる体制を整えるかどうか検討していく。

▶近い関係への配慮

関係が近いからこそ困り感が言いにくい児童生徒に配慮し、第3者が話を聞ける体制を学校も理解してつくっていく。

▶部活動の持続可能性

専門指導者の確保や選択肢の少なさを解消するため、周辺自治体との連携や競技団体（スキー協会等）への委託を検討する。